

「いじめ」を考える(2)

村 島 義 彦

岡山理科大学理学部基礎理学科

(1997年10月6日 受理)

はじめに

先に公表した「いじめを考える」の第1弾¹⁾では、今日の教育トピックを独占しつつある「いじめ」について、これまでのアプローチとはやや方向を違えつつ、当のいじめ自体を、「大きいいじめ(=いじめ衝動に基づく行為一般)」と「小さいいじめ(=この衝動の学校での発現)」に区分した上で、

- (1) 人間の因業ともいふべき「大きいいじめ」の普遍性と本能性、
- (2) これの一環としての「小さいいじめ」の位置づけ、
- (3) 以上の認識に立った「小さいいじめ」への対応

を——学校観・生徒観にも及びつつ——ごく大雑把に論じてみた。

その中でわたしは、(1)および(2)の解釈がなぜこれまで採択されなかったかの背景に触れて、「学校」と「生徒」に対する従来の楽天主義的で性善説的なイメージを指摘した。すなわち、「学校=無菌の学習場」「生徒=大人とは別存在(無垢な天使)」といった固定イメージからは、そうした無菌の学習場での無垢な天使間の「いじめ」は、当然、「とんでもない非人道」と酷評されてしかるべきだからである。けれども今、リアルな現実を目を向けて、「学校=実社会の縮図(小さな社会)」「生徒=大人の小型(小さな大人)」とやや柔軟にイメージすればどうなるか。このイメージの転換に応じて、小さな社会での小さな大人間の「いじめ」は、今度は逆に、目にされて何ら不思議のない「小さいいじめ」として位置づけられてくる。「いじめ」をどう捉えるかの問題は、このように、「学校」と「生徒」をどう捉えるかの問題に呼応し、「学校」と「生徒」をどう捉えるかの問題は、つまるところ「人間本性」をどう捉えるかの問題に呼応する。

以上を承けつつ、(3)の「小さいいじめ」への対応では、いわゆるアルコールやタバコへの対応に倣って、いじめの市民権を一応は是認した上で、そのコントロールを本人に委ね、そこでの行き過ぎのみをチェックするという姿勢で、今日の「いじめ問題」に対処すべき点のみを指摘した。かなり総論的なこの種の対応案の物足りなさを補う意味でも、今回の「いじめを考える」の第2弾では、やや各論的な対応案を——「学校」と「生徒」のイメージ転換に応じて、当の学校で生徒が学ぶ「学習内容」もどう解釈し直されてしかるべきかに触れつつ——模索してみたい。

I

さて、「学校＝清濁・善悪のすべてを混在させた実社会の縮図」「生徒＝清濁・善悪のすべてを混在させた大人の小型」と基本的に捉えるなら、そうした学校でそうした生徒の学ぶべき「学習内容」として、実のところ、どうした中身が想定されてしかるべきだろうか。

周知のように、今日の小・中学校の「教育課程」は、「各教科」「道德の時間」「特別活動」の3分野からなり、これらが、学校活動の全体を網羅している。そして、こうした学校活動を介して広く一般に目指されているのは、まず第1に、基礎学力の育成（知育面）であり、第2に、道德性の啓培（徳育面）であり、第3に、身体健康（体育面）であるだろう。とはいえ、“知・徳・体の調和”が一応は謳われているものの、現実には、「徳」と「体」に勝って「知」が圧倒的な幅を利かせ、学校のカリキュラムが「知」を主体に組まれている点是否定できない。こうした「知」への過重傾斜をカバー——ないしカムフラージュ——しようとして、学校では、成績順位の非公開、競争の否定などを実施しているけれども、大半の生徒は、こうした学校と並行して、放課後の塾通いにせつせと励んでいる。塾ではむしろ、「徳」と「体」を削除して「知」—— わけても受験に関わる「知」—— のみが徹底して鍛えられる。流される汗の量を正直に比べるなら、学校と塾で、どちらが生徒のウェイトをより占めているのだろうか。半々なら“まずは良し”としなくてはならない。こうした現実を見るにつけ、さらには、昨今のメディアを介した情報の豊かさ・スピード・真新しさを顧みるにつけ、学校が担っていた知育面での意味は、一昔前に比べて、驚くほど薄れていると結論づけざるを得ないだろう。

これに加えて、今日の小・中学生の父母は、その4割近くが大学卒——短大卒も含めて—— といつてよく、さらにその2割近くは「教員免許」を所持している。時間が許すなら、そして熱意があるなら、教科書を片手に家庭教師としてわが子の勉強を助けることも不可能ではない。こうして、学校と教師のみが数少ない知識の供給者であった一昔前とは異なり、今日、学校と教師の担う知育面での独占権は、大幅に狭められているのがリアルな現実である。そうした中で、学校と教師が最大に担うことのできる教育的側面として、果たして何が挙げられるのだろうか。知育面は塾および両親も、体育面は専門のスポーツクラブも一応は肩代わりできるとするなら、学校と教師に残されているのは、実に徳育面のみののだろうか。とはいえ、この徳育面についても、各種の倫理団体、宗教団体の主催する修練合宿・錬成合宿の方が、少なくとも専門性・徹底性・組織性の上で、今日の学校と教師より数段は勝っていると考えなくてはならない。

II

およそこのように眺めるなら、学校と教師の今日的な存在意義を、一昔前のように、知育面、徳育面、体育面といった個々の分野自体に簡単に求めることはできない。学校と教師に勝るとも劣らない能力で、—— 少なくとも個々には —— それらを肩代わりできる機

関がすでに存在するからである。とはいえ、個々には肩代わりできても、3つをトータルして肩代わりできる機関はいまだ存在せず、この点で、今の学校に勝るものはおよそ見当たらないと考えて、あくまでもここに、学校の存在意義を固定するのはできない話ではない。その場合にはしかし、学校と教師は、3つの分野での個々のスペシャリスト性に劣りつつ、3分野のすべてに関わるジェネラリスト性の点で、かろうじて他の機関を凌ぐことになるが、こうしたジェネラリスト性は、では具体的にどうイメージされればよいのだろうか。

学校と教師に期待されるのは、あくまでも大いなるジェネラリスト——つまりはジェネラリストとしてのスペシャリスト——性であるという要請は、たとえば、「学校＝実社会の縮図」「生徒＝大人の小型」という先に指摘したリアルな学校イメージ・生徒イメージに基礎を置いて、こうした学校でこうした生徒が学ぶべき「学習内容」の主たるひとつに、従来の教科目に加えて“人間関係のイロハ”を入れる形で具体化されないだろうか。生徒が「大人の小型」であり、学校が「実社会の縮図」である以上、当の学校では当然、シビアな現実社会で大人たちが知恵・力・人脈・富・地位を総動員してくり広げる生存競争が、むろんスケールダウンされ、かつ徹底性・緻密性・組織性に大きく劣るものの、やはり生々しく展開されて何ら不自然はない。そうした生々しい展開の目にされない事態の方が、むしろ逆に不自然であるとも考えられるからである。

子供の世界である学校は、大人の世界である実社会と変わらず、基本的には、生存競争に彩られた修羅の場であるとイメージするなら、このミニチュア版の「修羅の場」でかなりの年月を強制的に過ごす生徒にとって、当の在籍は、そもそも何をポジティブには意味しているのだろうか。学校という「修羅の場」の住民は、小さな大人たちである。かれらは、大人の計画した年間スケジュールに従って、大人（＝教師）にコーチされつつ、一方では、おのれに固有の修羅を展開していく。その意味で学校は、実社会から隔離された無菌の理想社会というよりは、小さな大人たちの営む、それ自体が雑菌に深く浸透された修羅社会に他ならない。そこで今、当の学校を、実社会とのこうしたアナロジーで捉え直すなら、今日の「いじめ問題」はどうした姿をまとうだろうか。

もし仮に、今日の「いじめ問題」が大人の世界で展開されていたなら、マスコミに大々的に報道された自殺に代表される悲惨な結末も、果たして、あれほどにニュース価値をもち得たかどうか。察するに、さほど大したニュースにもならなかったにちがいない。大人の世界では、各自の職業分野で、反則ギリギリにまで及びつつ——否、時にはあからさまに反則も犯して——苛酷な生存競争がくり広げられ、敗者は、容赦なく淘汰されていく。まことにシビアであるものの、これに正面から異を唱える大人はいない。大人なら、これが世の現実なのだと素直に認めて、こうした是認の上に、各自の生存競争に負けないための知恵と汗を必死に絞り合うからである。生きることは一種の生存競争であると、大人には共通に納得されている。この納得で事に臨むから、わが身にこうむる「大きないじめ」

の数々も、生存競争のいうならばマイナス要因として、その意味では、克服すべきハードルとして基本的に位置づけられた上で、これへの抵抗なり、我慢なり、迎合なり、克服なりが、時々の情勢に合わせて効果的に図られていくのである。

「大きいじめ」に対する大人のこの姿勢は、それゆえ基本的に、生きることは一種の生存競争であって、大きいじめも、そこでの克服すべきハードルのひとつでしかないという辛口の納得ないし覚悟に立脚していると言ってよい。そうであるなら、学校での「小さいじめ」についても、もし仮に、学校とは小さな社会である以上、そこでも、小さな生存競争は展開されて当然であって、生徒は、大きな社会の大きな生存競争のヒナ型を、学校という場で——一応は教師に見張られつつ——予行演習しているのだと捉えるなら、こうしたいじめも、大人の世界の「大きいじめ」と同じく、生存競争の中に織り込まれた克服すべきハードルとしてイメージされるのではないだろうか。このイメージが、生徒自身にも、両親にも、そして教師にも共有される時、今日のいじめ問題は、それ自体が依然として存続する際にも、当の問題性を大きく変容させるのは明らかだろう。小さいじめは、それを介して生徒が、人間関係の明暗・表裏を学び取る“負の契機”以上でも以下でもないからである。

III

学校自体を「無菌の理想社会→雑菌に浸透された実社会の縮図」に、生徒自体を「無垢の天使→大人の縮図」に大きくイメージ転換し、これに呼応して、学習内容のイメージも「知的教科目中心→知的教科目+人間関係のイロハ」に転換するなら、学校社会の「小さいじめ」も、大人社会の「大きいじめ」と同じく、今日的なトピック性を大幅に失うほかはない。いじめ自体は、むしろ肯定されてはならないものの、その存在を否定するのは至難であり、むしろ当の存在を是認した上で、あくまでもこの前提に立って人間関係を工夫していくのが得策であろうと思われる。ここでは、「大きいじめ」が社会病理の ONE OF THEM (数あるひとつ) でしかないように、「小さいじめ」も、学校病理の ONE OF THEM として位置づけられている。この位置づけを共有して、生徒も、両親も、教師も、現実の「いじめ問題」に対応するというスタイルは、果たして、教育にあるまじき振る舞いなのだろうか。

大人社会は、さまざまの競争が渦巻く修羅の場であって、この点は、事の善し悪しは別にして、誰もが一応は認めないわけにはいかない。であるから、こうした修羅のひとつとして、「大きいじめ」にもそう目くじらは立てられないのである。けれども、これと同じ発想を「学校」という小さな大人社会に適用しようとすれば、何かしら、無言の抵抗ないし阻止が感じ取られるのは何故だろうか。リアルな修羅の場を、大人社会から子供社会にまで遡らせるのは、大人社会がそうした渦中にあるから逆に、あえて抵抗を呼ぶのだろうか。せめて子供社会だけは、そうした修羅から解放された場であってほしいと願う大人の

密かな想いに、この抵抗は、大きく支えられているのだと解釈されなくもない。とはいえこれは、あくまでも大人の願いであって、こうした願いとリアルな現実が安直にすり替えられてはたまらない。

なるほど、「学校」という子供社会を、大人社会とは別に、修羅から解き放たれた憩いの場と位置づけて、こうした位置づけにいつそう近いものに築き上げようと図る努力と熱意は、当然に高く評価されるべきであるにしても、だからといって、こうした位置づけを、まさに位置づけである点も忘れてリアルな現実と錯覚するのは、明らかな行き過ぎと謗られるほかはない。おのれの主観的な位置づけをリアルな現実とダブらせて、この未熟な混同に立脚しつつ「学校」を論じ、「生徒」を論じ、「小さないじめ」を論じるのは、それ自体がナンセンスであるため、そこに導き出された諸問題も、当然にナンセンスの謗りを免れ得ない。導き出された問題の問題性は、あくまでも、前提それ自体のズレに由来したからである。

では、論の前提を“大人の夢”から“リアルな現実”に置き換えるなら、それでも不都合は生じないのだろうか。大人が、まさに大人(=修羅の巷に生きる者)であるからこそ、あるいは「生徒」に、あるいは「学校」に託した密かなロマンの類いは、これによって、甘さの部分を大きくそぎ落されることになる。生徒への幻想、学校への幻想は、当の幻想部分を容赦なくそぎ取られる。あとに残されるのは、幻想というロマンの衣を剥ぎ取られた、ありのままの「生徒」であり、ありのままの「学校」である。なるほど、一抹の侘しさと寂しさと空しさは覚えるものの、これ自体はしかし、ひとつの健全への回帰であって、むしろ前向きに評価されてよいのではないだろうか。

これによって学校は、むしろ、夢を語る場としての役割を何ら抑える必要はない。生徒も、両親も、教師も、今までと同じ機能・同じ役割を学校に期待して構わない。異なるのはあくまでも、生徒自身、両親自身、教師自身に、今までと異なる「生徒」イメージ、「学校」イメージ、「学習内容」イメージが要求される点なのである。

IV

生徒という「小さな大人」が、学校という「小さな修羅の場」で学習すべき内容の中心に「人間関係のイロハ」を据えるという発想は、大人の世界をイメージするなら、さほど不自然とも思われない。たとえば、われわれの生きる現実社会に何らかの危険や事故はつきものである。なるほど無事故に越したことはないけれども、われわれは普通、いくつかの事故に出会うことを前提に日々の生活を組み立てているのではないだろうか。いわゆる保険の制度などは、これの好例と思われる。われわれは、将来の予期せぬ事故に備えて、数々の保険に加入しているからである。結果として、当の保険が掛け捨てになる場合も少なくない。それはしかし、たまたまそうであったにすぎない。基本線は依然として、われわれ自身が事故と出会う可能性の否定しがたき——つまりは肯定——にある。

危険・事故・病気はこのように、“無いのが普通”というよりは“いくつか有るのが普通”とごく一般に了解されている。基本の立場が、有ってもおかしくないであるから、たまたまほとんど無いという場合に、こうした事態は、“あたり前”ないし“当然”と考えられるよりは“有り難い”とごく素直に感謝される。けれども今、このほとんど無い状態を単なるあたり前と考える立場からスタートするのだろうか。この場合には、いささかの危険・いささかの事故・いささかの病気に出会っても、とんでもない異常・とんでもない例外・とんでもない珍事とおそらくは判断されることだろう。ここでの問題点はしかし、言うまでもなく、当の危険・事故・病気との出会いによりは、それを異常・例外・珍事と判断する当人の側にあるのである。

ごく普通の大人なら、意識すると否とにかかわらず、いく分は、おのれの人生を一種のゲームと位置づけているのではないだろうか。そこには、囲碁や将棋などの、あるいは野球やサッカーなどのゲームと同じく、定められたルールの範囲内で、互いに知恵と力をふり絞って、相手を何とか負かそうと謀り合う営みが熾烈にくり返されている。各人が、それぞれのゲームのメンバーなのだという暗黙の了解下に生きているからこそ、ルールを無視した陥れは例外として、おのれの知恵と力が及ばなかった結果である敗北には、素直に自らの責任を認めないわけにはいかない。そうした敗北の責任を負えないようでは、はじめから、ゲームという勝負に参加する資格はないのである。逆に、参加した以上は、結果としての勝敗を覚悟しなければならない。相手の手加減ないしお情けを期待してゲームに臨むようでは、およそゲームは成り立たない。ゲームの中で頼れるのは、あくまでも当人のみ——この基本線を崩すことはできない。

大人は一般に、基本的には妥協のない、こうしたゲームの世界（＝人生）に身を置くからこそ、その中で、この種のゲームの熾烈さを超えた“思いやり”にはからずも接した場合に、わけても強い感謝と喜びを噛みしめる。この種の思いやり——あるいは惻隱の情ないし武士の情け——は、相手から期待されてよいというよりは“あれば御の字”であって、あたり前というよりは文字通りに“有り難い”ものだという点を、大人は、自らの体験を介して身近かに肌で感じ取っているからである。人間は、基本的には孤独であり、だからこそ逆にまた、自分の足で立って歩む信頼するに足る仲間に出会えた時には、そうした出会いを何よりも大切にする——これが、大人に共通した体験ではないだろうか。そして、自分の足で立って歩む者の周りには、同様に、やはり自分の足で立って歩む者たちが集まってくる——これも、大人に共通した体験であるだろう。そうだとすれば、これはまた、子供という「小さな大人」の世界でも基本的に同じだと考えなくてはならない。

子供という「小さな大人」は、学校という「小さな社会」で、こうした辛口の事実を「学習内容」の重要なひとつとして、それぞれの肌に学び刻んでいかなくてはならない。学校自体は、生徒が、親と教師から間接的に“頭で学んだ”この事実を、さらに直接に“肌で確かめる”場としても位置づけられるべきだろう。

およそこのように考えるなら、今日のいじめ問題への基本的対応として最初に提示された、生徒・両親・教師による「人生＝ゲーム」観の共有という処方箋は、これによっていじめの問題が、今のままでありながら、当の問題性を大きく変えるという奇妙な効果を発揮するだけでなく、いじめの問題それ自体が、逆に、上の「人生＝ゲーム」観を導き出すモメント（契機）としても機能する奇妙なアイロニーに、われわれは改めて驚かされるのである。

おわりに

とはいえ、今日の「いじめ問題」への具体的対応として、上にみたように、生徒自身、両親、教師相互のこれまでの「生徒」認識、「学校」認識、さらには「学習内容」認識をおよそ180度チェンジして、大人の世界のイメージをそこに直かに導入するといった大胆な奇策は、そもそも妥当なのだろうか。この奇策は実に、大人社会がその基礎に据える“修羅の現実”を子供社会にまで遡らせる試みであった。なるほど、われわれの日常を虚心に眺める限り、こうした試みは、基本線でさほど狂ってもしないと思われる。あるいは自身の子供体験（の闇の部分）に、あるいは、昨今の少年非行の数々にデータを求めるなら、この方がむしろ、リアルな現実にいっそうマッチしていると考えられなくもない。

けれども、単に「リアルな現実にいっそうマッチしている」からといって、これを基本のベースに据えて、ここから各種の対応を模索していく姿勢は、あまりに荒んだニュアンスから、とうてい教育的姿勢とみなしがたいと批判されるかもしれない。何らかの形で未来への夢を託した教育を語るのに、こうした姿勢は基本的にそぐわないと判断されるからである。とはいえ、教育に「未来への夢を託す」のと、今ある現実をあくまでも現実としてリアルに捉えるのとは、必ずしも矛盾・対立するわけではない。託された「未来への夢」は、その中身が、シビヤな現実から遊離した画餅に近いものであるなら、文字通り「無力なドリーム（夢）」に終わるほかはないだろうし、そうでない場合にも、夢の実現には縋じて、当の夢を展開すべき具体的な場としての今ある現実が、できるだけ確に捉えられていなくてはならないからである。前者については、単に「無力なドリーム」に終わるといったネガティブな負の局面のみでなく、さらに、ポジティブな負の局面もある点を見逃してはならないだろう。〈Ⅳ〉にも軽く指摘したように、焦点のズレた夢は、おのれに合わせて現実を容赦なく切り刻んでいくからである。

このように、あってほしい姿をモデルに仰いで、これに合致させるべく現にある姿に手を加えていくスタイルは、それ自体としてごくまともであるものの、その場合にも、当のあってほしい姿が、あまりに現実と遊離した絵空事であるなら、これのモデルとしての的確性——あるいはその恐ろしさ——をわれわれは改めて問わないわけにはいかないのである。

注

- 1) 村島義彦「いじめを考える」(『いじめ』についての多面的提言) 青年教育科学研究会, 1996年12月, 109-125頁に所収)。

Some Consideration about Japanese Bulling (Part-2)

Yoshihiko MURASHIMA

Faculty of Science,

Okayama University of Science,

Ridai-cho 1-1, Okayama 700-0005, Japan

(Received October 6, 1997)

In the Part-1 of Some Consideration about Japanese Bulling, at first, I divided our bullings into “big one” and “small one”. Then I discussed mainly next three points.

- (1) Generality and deep-rootedness of “big bulling” as the human original sin
- (2) Positioning of “small bulling” as one variation of “big one”
- (3) How to respond “small bulling” from such stand-point

But these discussions —— especially about (3) —— were rather general and abstract. To supply such weak points, I argued here more concrete response to “small bulling”. That is, I discussed how we should re-interpret the contents which pupils learn in school according to the big image-change of school and pupils.

So the structure of this paper is as follows;

〈Prologue〉

- (I) To where we should quest for the reason d'être of school and teacher ?
- (II) School as the place to learn ABC about human relations
- (III) Why such school image is interrupted ?
- (IV) The validity of this school image

〈Epilogue〉